

Title	Brutzkus著“Economic Planning in Soviet Russia”
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.4 (1936. 4) ,p.577(155)- 583(161)
JaLC DOI	10.14991/001.19360401-0155
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360401-0155">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360401-0155</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

計畫經濟に關する研究は、近年世界各國に於て多大の興味の的となり、出版せらるゝ關係著書の數は著しく増へて居る様である。之に關する實際問題として最も興味のあるものは何と言つてもソウェイトロシアの實狀である。ロシアに於けるボルシェビキ革命以後の歴史は、謂はゞ従來の自由主義的經濟理論の妥當性に就ての重大な試金石であり、其成敗如何は將來の世界各國の經濟的發展乃至其政策に對して多大の影響を與へずには置かぬものである。然るに吾人に取つて頗る不幸なことには、ロシアの内狀を正確に知ることは非常に困難である。革命以來現今行はれて居る第二次五年計畫に至るまで、其報告書調査書は無い譯ではないが、其内容に對して信頼を置いてよいものか何うかゞ不明なのである。社會主義の主張者や或は又之に好意を寄せるものは、ロシアの爲に有利なる報告書を利用し有利なる判斷を下す、又反社會主義的研究者はロシアの爲に不利なる報告書を採用し、不利なる意見を發表する。

Brutzkus 著

“Economic planning in Soviet Russia” pp. 234, London 1935.

氣賀健三

計畫經濟に關する研究は、近年世界各國に於て多大の興味の的となり、出版せらるゝ關係著書の數は著しく増へて居る様である。之に關する實際問題として最も興味のあるものは何と言つてもソウェイトロシアの實狀である。ロシアに於けるボルシェビキ革命以後の歴史は、謂はゞ従來の自由主義的經濟理論の妥當性に就ての重大な試金石であり、其成敗如何は將來の世界各國の經濟的發展乃至其政策に對して多大の影響を與へずには置かぬものである。然るに吾人に取つて頗る不幸なことには、ロシアの内狀を正確に知ることは非常に困難である。革命以來現今行はれて居る第二次五年計畫に至るまで、其報告書調査書は無い譯ではないが、其内容に對して信頼を置いてよいものか何うかゞ不明なのである。社會主義の主張者や或は又之に好意を寄せるものは、ロシアの爲に有利なる報告書を利用し有利なる判斷を下す、又反社會主義的研究者はロシアの爲に不利なる報告書を採用し、不利なる意見を發表する。

研究を發表するものが既に前以て黨派的な先入觀念に捉はれて居る以上、斯様な見解の相違は或程度まで避けら

れぬことに相違ないであらうが、吾人に疑念を懐かしむる最大原因はソヴェト政府の極端な獨裁政治と其秘密主義に在るのである。即ち當局は其獨裁権を利用して、一方には國內に於ける言論の自由を極度に壓迫し、又外國人の國內旅行に制限を加へて其内情報告を防止し、他方に於ては計畫經濟の發表をば國家の機關を通じてのみ一般に公表するのである。立場を異にする多數の研究者が自由に其研究の結果を報告するならば、事實の眞偽の程は自ら判明して來るものであるが、今日のロシアが極端な獨裁政治の下にある以上、一片の報告書、調査資料と雖も自ら實地に調べたのではない限り單純に信賴し難いのである。報告書の採否如何は結局之を讀む者の豫備知識に依つて決する外はないと見て爲る。

此處に紹介するブルツクスの著者は筆者の考へでは相當信頼し得るものではないかと思はれるが、ロシア研究書の一つである。此書の序文を書いたハインツの紹介に據れば、ブルツクスは一九〇七年より同二三年に至るまでペテルスブルグに於て農業經濟學の教授として第一流の權威を認められ、其最後の年に於ては暫くの間、農業に關する人民委員會のペトログラード地區の農業計畫委員會の委員長として活動したのである。然るに其年の終りに故國を追はれ、爾來十年間、ベルリンの Russian Scientific Institute の教職に就き、最後にナチス革命の爲此地位を追はるゝに至つたのである。ハインツの言葉を藉りて此書の眞價を裏書するならばかうである。彼はロシアの實狀に熟通して居る爲、大冊の官廳統計よりも實際の事情をより詳しく物語る所の比較的入手し難い資料——蓋しそいふ資料は外國人の利用の爲に準備されて居らぬからである——に近附くことが出來たのである。然かも、讀者にも判る通り、驚く程の完全且つ明晰な描寫を綴り併せた其元來の斷片的報告書は總て皆最も權威ある典據よりの報告から集めたものである。予は茲に此書中に集められて居る彼の著作をば現代のロシアに關する點に科學的なる文獻の第

一流に位せしむるに躊躇しない」と。(序文九頁)

此書は二つの論文より成る。一つは「ロシア革命に照して見たるマルクシズムの學說」と題し(一—一九四頁)、他の一つは「ロシアに於ける經濟計畫の結果」(九七—二三四頁)と題する。其題名の示す通り前者は主として理論的研究であつて、マルクスの學說がロシアに於ける實驗と如何に矛盾するかを指摘するもの、後者は革命以來の第三次五ヶ年計畫の終了に至るまでのロシアの經濟的變遷の跡を記述し、政府當局の政策の齟齬矛盾暴露を暴露せるものである。

第一部に於ては最初にマルクスに依據して社會主義機構の輪郭を述べる。次いで人間の經濟的行爲の目的たる欲望の満足が如何にして行はれるかを問題にする。資本主義社會では、市場に於ける價格機構と企業家の利潤獲得行爲が此任務即ち欲求される財貨の種類と數量を提供するのであるが、社會主義社會では、何に依つて之を行ふか。換言すれば財産の私有を許さず財貨の交換を認めない社會に於て、價格に代つて經濟的計算を行ふものは何であらうか。

生産すべき財貨の種類と其數量決定の方法として考へられるものは、一つは實物計算、即ち所謂自然經濟の組織である。Bucharin や Tschajanow の如き學者が此説を唱導したが、之は結局實行困難であつた。第一に異種財貨の重要性の比較や總計が困難であり、實施も亦不可能であつた。之に反對して Strumlin や Varga は労働を以て價値の尺度に充てんとする説を唱へた。此案の論理的矛盾や實施困難な次第も亦ブルツクスの明瞭に指摘する所である。

彼は労働費用の示す價格が決して消費者の需要の強さに比例するものでなく、價値の根底には埃太利學派の説く

が如き意味の主観的評價が存在せざる可からざる旨を説いて居る(二四頁)。

價值計算の正しき基準を持たない社會主義は「資本家的生産の無政府を克復して其代りに超無政府の状態を齎らす。『超無政府に比較すれば資本主義は遙に調和ある状態を示して居る』(四九頁)」とブルツクスは云ふ。

彼は更に筆を續けて地代、利子、利潤が、生産要素の代價として、歴史的範疇でなくて經濟學の論理的範疇であることを説く。

社會主義と自由とを論ずる章に於ては、經濟的自由が資本主義社會に於てこそ享受されるが、社會主義社會に於ては、消費の自由すら制限されざるを得ざる次第を述べ、國家の強力、壓制は社會主義社會に於て益々必要となり愈々發揮されるといふ。

最後に、社會主義社會に於ては勞働者の利己主義的心理は依然として存在し、之に依存することを嫌つたロシアの實驗が完全に失敗し、今では政府當局が賃銀と生産力とを比例せしむることに汲々たる有様にあることを指摘する。

第二部はソウエトロシアの經濟計畫の失敗の歴史を讀むが如き感がある。經濟政策が豫期の結果を齎らさぬ爲め、變更に變更を加へられ、又時々の政治的原因に基いて經濟政策が多大的影響を受ける有様がよく看取される。

一九一七年の十月革命に於てレーニンが政權を把握した當時の意見は「ソウエト政府の下に於ては國家資本主義が社會主義の四分の三を構成する」といふのであつた。然るに此試みが少しも資本主義の支配權奪取に役立たぬことを知り、翌一八年の夏に至つて、此制度は全く廢止され、茲に後になつて戰時共產主義と呼ばれた制度が一九二一年に至る三年間繼續した。ブルツクスに依れば此名稱は共產主義者が戰爭の爲に必要だつた一時的制度だとい

ふ言譯を設ける爲に作り上げたものであつて、此制度を實施せる當時は決して一時的なものとは考へられなかつたと言つて居る。戰時共產主義は所謂「自然的」社會主義を齎らさうとするものであり、貨幣の流通を無視し、賃銀は實物の割當制度を施かんとした。然かも價値の計算の必要に迫られて勞働價値を基礎に置かんとしたが「何人も此公定基準を眞面目に取らなかつた」といふことである。斯様な無暴な政策は、當時未だ多少の自由と武力を備へて居つた民衆の反抗を喚起しソウエト政權の危機を生んだのである。レーニンは政權保持の爲め急速に政策を變更する必要に迫られ、其友人の忠言を入れて、所謂新經濟政策の採用と爲つた。

新經濟政策への變更の根本は市場の恢復である。同時に私的企業の協力も認められるに至つた。「戰時共產主義の期間は市場經濟の爲の消極的證據を與へたとすれば、新經濟政策の時代は其利益の積極的證明を示した」とはブルツクスの言葉である(一〇九頁)。

然るに此政策實施の結果は社會主義政權の存續の爲には恐る可き強敵を生み出すことに爲つた。私企業の隆盛及び大規模經營の農民又は富農の勢力増大即ち之である。茲に於て絶對的政治權力を利用してソウエト當局の私企業撲滅富農退治の運動が起り、それは延いて、計畫經濟の實行計畫へと移つて行つた。其計畫は初めの中は市場の上に關係を保つて需要と供給の數を計ることを自指したのであるが、それは結局國家企業の經營困難を實感せしむるに役立つものであつた。國家は經費の不足を補ふ爲に私企業主として農業經營よりの掠奪、強制徵收を行ふより外に道がなかつた。

斯くして二年間の準備を経て一九二九年に第一次五ヶ年計畫が發表されるに至つた。

此計畫の内容及び其實施の結果、續いて第二次五ヶ年計畫の内容及其現狀は、本書中吾人の最も興味を惹く所の

ものである。此方面に關する正確なる知識こそ今日の吾人に取つて容易に得難いものである。

ブルツクスの断定はソウエト政府に取つては頗る不利である。ソウエト政府のあらゆる發表にも拘らず、其好成績を傳へる數字は少しも眞實の姿を現すものでないと判断され、生産力の減退、饑饉の頻發、一般人民の生活標準の低下、政府の強制的農産物掠奪等の悲惨なる出來事が、恰も政策實施の當然の結果なるかの如く描き出される。五ヶ年計畫は其最初の約束を果さぬ許りでなく、労働者農民の自由を奪つて一部の共産黨員の犠牲たることを強ひて居るのである。所謂るゲー・ペー・ウーの監督制度聯邦各地に施されるに至つたのは、實に計畫實施の爲に必要な苛酷な強制徴収に背くものを死を以て罰する爲であつたのである。

最後の一章は五ヶ年計畫の結果に關する經濟理論的批評であつて謂はゞ全篇の結論にも相當する。ブルツクスが計畫經濟失敗の重要原因として擧げて居るものは、政治が經濟を支配して居るといふこと、換言すれば専門家ならざる素人が經濟組織を管理して居ることである。之は正に其通りに相違ないであらう。ブルツクスの最後の結論は次の如くである。

「資本主義制度に對する社會主義者の批判の出發點は、前者が先づ第一に全人民の需要品を供給することに關つて居ないといふ不平である。之に對して社會主義者は斯くの如き制度を設定すると主張する。然るに今、ソウエトロシアの計畫經濟に於ては、全く政治的見地からのみ考へられて居る經濟組織が存在する。而して此組織は全人民の需要満足を全然二次的なものにしてつた。一經濟組織の此政治的變質は、人民の經濟生活から市場の支配的諸勢力を徹底的に排除する試みが如何に危険であるかを明にして居る。縱令ひ貨幣制度の上に立つとしても、社會主義的經濟計畫が正常に大衆の要求に應ずることが出来ることを示す證據は一つも無い。之に反し、斯様な組織が

他の如何なるものよりも非經濟的目的の成就に濫用され易く、同時に又國民の糧食維持の問題を全然放棄し易いものはないといふ證據は存在する」と。(二三四頁)

附記、此書の姉妹篇として、同じ年にハイエク編纂に係る“Collectivist Economic Planning”といふ書物が出版されて居る。之は社會主義の可能性に關する批判的研究論文を集めたものであつて、ピアソン、ミーゼス、ハルム、パローネ及びハイエクの論文集である。其論ずる所は何れも主として計畫經濟に於ける、生産より分配への道程が如何に行はれるかを主題として其非合理的、反經濟的なる論理を證明し、社會主義社會を經濟的に定むべからざる次第を力説せるものである。研究は専ら理論的であり、ピアソンよりハイエクに至るまで問題の論理的發展の順序が窺はれて面白い。ブルツクスの著書と併せ讀むならば興味は正に倍加するであらう。